新人漫画大行進：入選作品

ミドリの金魚

サルクンゾウ

しかしまた

この肌寒い時期に

金魚すくいなんて……

もう10月も半ばだというのに……

ビチビチビチビチ

ビチビチビチビチビチビチビチビチ

金魚だ

飛びだしちゃったのか
わーちびっけー

パクパク

逃げだしたのかな……

カン
カン

ガチャ

パッ

ジャー

チャポーン

生きてる
生きてる

さてと

シャカシャカ
シャカシャカ

二週間前……
ガラガラガラ

彼女が出ていった
カラン

会社は
ショッと

一カ月前辞めた
ばっ

会社には未練はないけど
パチッ

彼女には未練があるなぁ

すごく…

ムムム
ジリジリジリ
チャプ
ジリジリジリジリ
バン
ムクッ
ぱくぱく
コーンフレークって
うまいよなぁ…
ジャク
ジャク
あっ
そうだ

さあ
お食べなさい

あれ?

よく見たら
お前って
らんちゅう
なんだな

会社をやめた僕は
バイトで生活している

お早う
ございまーす
ガチャン

僕のバイトは
ジャブ
ジャブ
肉屋だ
ザパー
大腸
しかし、あれだな
肉ってのは
こうやって見てると
とても食べ物とは思えないいな
ましてや
ダン
生きてたなんて……
コロン
鳥丸って
ランチュウ
ぽいな

ゴンちゃんは、ちょっと足りなそうな人で、

ゴンちゃーん
これも頼むよ!

はーい

肉屋って、なんかこーいうのってゾクゾクするな……
ゾク
ゾク

その夜
キィー

ぐぅ
ぐぅ
チャプン

一人の夜は長い
はあああー

…彼女が帰ってきた

こうなると
‖
‖

思ってたんだ
チャプン

金魚だよ
ランチュウ

金魚でいちばん
悲しいランチュー

ねえ

この金魚
色が
変……

ミドリ色

え

ふうん

そういえば、僕は
色盲であった

彼女の掌に乗せられた金魚は

みるみる溶けだしてしまった

溶けちゃった
きれいな
ミドリ色……
そう言うと彼女は
それをなめた
あま――い
ハイ
それは懐しい
肝油の味がした
うん
ね
その夜、僕たちは夢をみた
まっ赤な水の中を
ミドリ色の金魚が泳いでいた
それは、すごく鮮やかで
僕は無性にうれしかった……
終

ぼくの好きな、最近の変わったまんが家たち

—九〇年代新人まんがの風景—

村上知彦

一昨年から、双葉社の『漫画アクション』で、新人賞の選考を担当している。毎月十本から二十本前後の作品に目を通し、現場の編集者たちと合評して、最終選考にまわす作品を選ぶ。四カ月に一回、ぼくのほかまんが家三人と、双葉社の青年各誌編集長を含めた選考委員会で、入選作品を決める。目をみはる新しい個性が現れた時はいいが、そうでもない時にはけっこう疲れる作業だ。初めから飛び抜けた才能と新しさを備えた新人が、そう簡単にみつかるわけがないから、たいていは短所ばかり目につく作品の中にキラリと光る何かを、見逃さないことに心を砕くことになる。

そんなこともあって、雑誌などで目につくかぎりの新人の作品は、できるだけ気をつけて見るようにしているつもりだ。さまざまな人の目を経て、掲載にまで至ったものには、やはりそれなりの新鮮さやユニークさ、面白さやうまさを持ったものが多い。だがいま改めて、本誌編集部の求めに応じ、最近の新人まんが家をメジャー誌を含めて幅広く展望して、その中に『ガロ』入選作家を位置づけてみようとすると、ぱっと思い浮かぶ名前というのは、実はひとつもない。ここ数年に限ってみても、いったい誰が新人で、いつデビューしたのか、さっぱりわからないというのが正直なところだ。

これは、近ごろのまんがというメディアが抱える、あきれるくらい厖大な情報量に、ぼく自身が追いつけないということもむろんあるだろうが、その厖大な情報の中で、新人まんがというものが、かつてとは異なった意味あいを帯び始めているということでもある。印象に残る名前がないということは、必ずしも新人の質の低下を意味しない。むしろ新人登用の場や機会が増え、全体的な水準が上がることによって逆に、とび抜けた個性のみが際だつということが少なくなり平均化されてきた、ということではないか。新人の作品を割合熱心にみていて、その場その場では印象的な作品に出会うことも多いのだが、その印象が持続することは少ない。かえって次々現れる同程度に印象的な作家によってその印象が薄められ、平準化される場合が多くなっているように思える。これは新人作家個人の問題ではないだろう。巨大になったまんが市場が、次々と一定レベル以上の新人を送り出すシステムを完成させたことの、必然の帰結といえるのではないだろうか。

例えば、小学館や講談社の漫画賞といえば伝統も権威もあるまんが界のある種のステイタスだが、近年はまだキャリアの浅い、新人と呼んで差しつかえない作家に与えられるケースも多くなっている。昨年の講談社漫画賞を受賞した「ナニワ金融道」の青木雄二、昨年の小学館漫画賞「うしおととら」の藤田和日郎、今年の小学館漫画賞「GS美神極楽大作戦」

の椎名高志、同じく「宮本から君へ」の新井英樹。彼らは皆、ここ数年の間に本格的にデビューした新人たちだ。

小学館は昨年から今年にかけて、『ビックコミック』『スピリッツ』『ヤングサンデー』という青年三誌でたて続けに新人作品を集めた増刊を出した。新人賞受賞作品を集めたもの、候補作品をならべて入賞は読者投票で決定するものなど形はいろいろだが、応募者の活性化と、入賞作家の読者への印象づけの方法を模索するものだといえる。講談社も、かつて『モーニング』の『パーティー増刊』がそのような機能を担っていたし、現在では『アフタヌーン』が百枚や二百枚の作品も一挙掲載する「枚数制限なし」をうたって、新人発掘の新しい方向を打ち出している。

そんななかで集英社のみが、新人賞作品を集めたコミックスを出すぐらいで、さしたる動きを見せてないように映るのが、かえって不気味である。集英社は、少女まんが誌をモデルにした新人募集、育成システムを七〇年代の間に早々に完成させていた。すぐれた受賞作品を出すことより、新人の量の確保とその後の育成、企画力に力点をおいたこのシステムは、雑誌自体の部数が力を持っているかぎり、本来派手なパフォーマンスをあまり必要としないのだろう。ただ、このシステムではヒット作品は生まれても、その新人の本当の個性、作家としての顔がなかなか見えてこないという難点はある。それが現在の、印象の薄い新人たちの乱立という状況を作り上げた、遠因になっているのかもしれない。

さて、そのようなおぼつかない印象を元に現在の新人地図をこれから描いてお見せしなければならないわけだが、いざ調べようとすると、信頼できる資料が全くない。手元にはまんが情報誌『コミックボックス』の、ここ三年のベストテン号があるのだが、これがほとんど何の役にも立たない。九〇年五月号には三百一人、九一年三・四月合併号には二百三十三人の、前年にデビューした新人たちのリストが掲載されているが、調査対象がメジャー誌の新人賞中心で、レディース・コミック誌や四コマ誌、マニア雑誌、ロリコン誌、中小出版社の青年誌などはすっぽり抜け落ちている。しかも昨年五月号のベストテン特集では、新人リスト自体がなくなっているし、昨年末から休刊が続いて、今年のベストテン号はまだ発売されていない。仮にもまんが情報誌を名乗る雑誌がこれでは困るのだけれど、まあつぶれかけの会社に文句を言っても始まらない。八九年と九〇年、二年分の限られたリストから、めぼしい新人を拾い出してみよう。

少女まんがで知っている名前は、『花とゆめ』で「赤ちゃんと僕」がヒットしている羅川真理茂だけだった。これはひどい。少女まんがを最近まるで読んでいないことが、ばれてしまう。しかし、少女まんがを読まない僕もひどいが、それでもまがりなりにも関心を持ち続けている者の耳に、一人しか名前が知られていないという少女まんが界の新人状況も、かなりひどいのではないか。もちろん優れた作家はいるのだろうが、それが少女まんがの外側にまで影響を及ぼすほどの存在と、なってはいないということなのだろう。

リスト以外で気になる少女まんが家には、西炯子と上杉可南子がいる。いつがデビューだったかはっきりしないのだが、『プチフラワー』などで活躍している。西炯子の描く、少年たちの、同性愛ともみえる微妙な心の交流。上杉可南子の描く、近世芸能の世界を背景とした時代ものに流

れる日常性。描く世界は異なっても、その繊細さと、作品にみなぎる完成された緊張感は、不思議に共通している。

少年、青年まんがに移ると、安藤浩司、犬丸りん、三好銀、井上三太、新井英樹、SUEZEN、藤田和日郎、入江喜和などの名前が並ぶ。安藤浩司は『漫画アクション』で、イースター島のモアイ像を主人公にした、動きのほとんどない奇妙な四コマまんがでデビューした。三好銀「三好さんとこの日曜日」はモダンなつげ義春とでもいいたくなる叙情的夫婦まんがである。井上三太は都市の少年たちを描いて、不気味なリアルさを漂わせる。以上いずれも、『ガロ』からデビューしていたとしてもおかしくない作風を持った作家たちだ。九〇年代初頭というのは、かつての〝ガロ的なるもの〟がメジャー誌の中に、あたりまえに場所を得るようになった時代でもある。

中では「Privation」で『スピリッツ』に入賞したSUEZENだけが、やや異色だろうか。アニメ系ののびやかに美しい線で、少年少女の日常にひそむ不思議をファンタジックに描く。この原稿を書きながらぼんやりとテレビを見ていたら、NHK教育の夕方の番組で彼女がキャラクターデザインを担当したと思われる「ヤダモン」というアニメを放映していた。

青年まんがで『コミックボックス』のリストに登場しない作家は、ただちに何人もの名が浮かぶ。西原理恵子、とがしやすたか、ほりのぶゆき、朝倉世界一らの、エロ雑誌系を含む四コマ誌などでデビューした作家たち。『モーニング』の「リング・ザ・ワールド」が記憶に残る、劇画タッチとはまた違ったリアルな絵と美少女が魅力の奇想ファンタジー作家、鶴田謙二。やはり『モーニング』に、宮崎事件への真摯な反応として「僕が殺したもの」を発表した西岡兄妹。そしてもちろんヤマダリツコ、QBB、山川直人、山田花子、安彦麻理絵、ねこぢるら『ガロ』の作家たちも見事に抜け落ちている。

これらの、質的にも量的にも、六〇年代や七〇年代の新人たちに決して見劣りしない、九〇年代の新人たちの名前を書き並べていて改めて思うのは、その相対的な小粒さと線の細さだ。一人で一家をなすような、異色の存在が見当たらない。だれもが、一見似たようなタイプの作家たちと並んで群として存在し、その中で自己の独自性を確認するため、目を内側へ向けているような、そんな気がする。

そんな中で『ガロ』の作家たちの存在は、作品の好悪は別として、相対的にではあれやはり見事なまでに印象的だ。安彦麻理絵が『ヤングチャンピオン』に描いている「おんなのこの条件」、『シャレダ!!』の「臍下の快楽」、『ふんふん』の「愛がなくっちゃね」などは、異色作家が並ぶそれらの雑誌での中でも異彩を放っている。デビューはやや古いが山野一が『グランドチャンピオン』に昨年連載していた「カリ・ユガ」などは、惰性でぼーっとまんが雑誌を眺めている読者の目を、ぶんなぐるような衝撃力を持ちえていたと思う。

相対的に、『ガロ』の新人たちは、他の雑誌に描いたときのほうが、その存在感が際立つようだ。〝ガロ的な〟まんががメジャー誌にまで拡散しているとはいっても、〝ガロ的〟と〝ガロそのもの〟では、やはりどこかが決定的に違うのだろう。〝ガロ的〟なるものが地に満ちている現在だからこそ、『ガロ』が〝ガロそのもの〟である新人を世に送り出し続ける意味は、ますます大きく重いといえる。

入選作品ひとコマ紹介

三橋乙揶

ある日若者は旅だった('65年12月号)

川崎ゆきお

うらぶれ夜風('71年10月号)

ひさうちみちお ('76年8月号)

パースペクティブ・キッド

イタガキノブオ/写真記('85年4月号)

森下裕美/少年('82年4月号)

鳩山郁子/もようのある卵('87年10月号)

津野裕子
冷蔵庫(八六年五月号)

泉昌之
夜行(八一年一月号)

ガロ入選作家データ

◎：ガロでデビューした作家
もしくは登場したことのある作家
◆：その他の主な作家

北海道地方

◎イタガキノブオ，唐沢兄弟
平口広美，三本義治
◆相原コージ，吾妻ひでお
星野之宣，モンキー・パンチ
山岸凉子

東北地方

岩手県
◎鴨沢祐仁，菅野修
吉田光彦，吉田戦車

秋田県
◎矢口高雄

宮城県
◎勝又進
◆いがらしみきお
石ノ森章太郎

山形県
◎星川てっぷ
ますむらひろし
安彦麻理絵

福島県
◎芳賀由香

関東地方

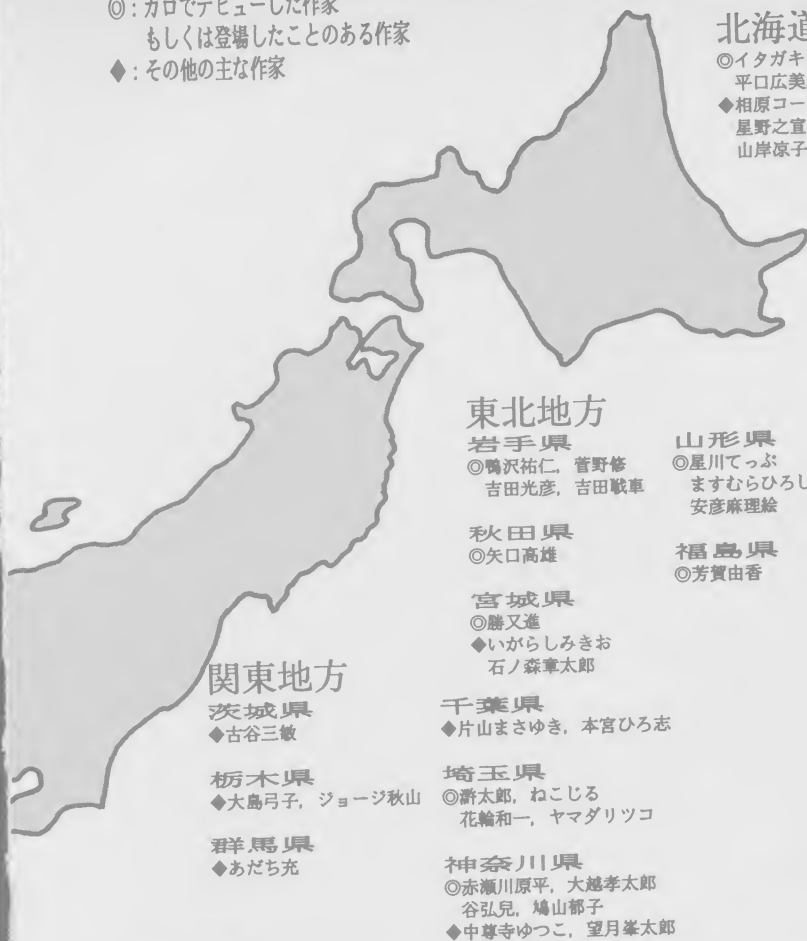
茨城県
◆古谷三敏

栃木県
◆大島弓子，ジョージ秋山

群馬県
◆あだち充

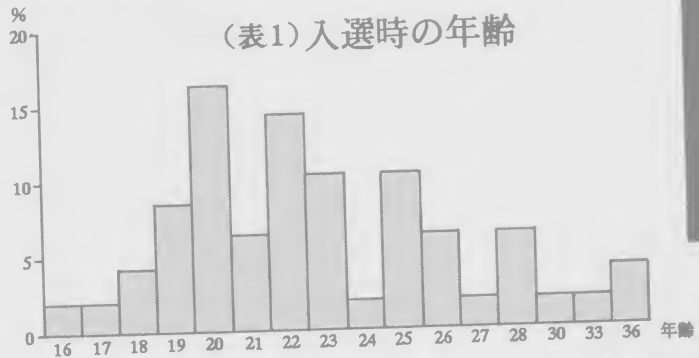
千葉県
◆片山まさゆき，本宮ひろ志

埼玉県
◎斎太郎，ねこじる
花輪和一，ヤマダリツコ

神奈川県
◎赤瀬川原平，大越孝太郎
谷弘児，鳩山郁子
◆中尊寺ゆつこ，望月峯太郎

東京都

◎嵐山光三郎，安西水丸，石川次郎，Q.B.B
白土三平，杉浦日向子，滝田ゆう
たむらしげる，つげ忠男，つげ義春
永島慎二，根本敬，平田弘史，松本充代
三橋誠，やまだ紫，湯村輝彦，南伸坊
秋山亜由子，山田花子，松井雪子
◆秋本治，朝倉世界一，上條淳士，玖保キリコ
車田正美，ちばてつや，土田よしこ
つのだじろう，長谷邦夫，原哲夫，芳谷圭児
わたなべまさこ

（表1）入選時の年齢

%
20
15
10
5
0
16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 30 33 36 年齢

（ガロ入選者48人を対象に算出）

毎月、ガロ編集部には数えきれないほどの原稿が送られてくるが、その内、入選作品として日の目をみるのは極わずかである。ここでは幸運にしてデビューした作家達のデータを集めてみた。入選時の年齢、出身地などにガロ作家特有の傾向はあるのか？

入選時の年齢

生年月日の判明した四八名の作家について、入選時の年齢を調べてみた（表1）。二十代前半で入選している作家が多く、平均は約二三歳。久住昌之、奥平イラ、鴨沢祐仁、根本敬などが二三歳でデビューしている。若くして入選した作家は、三橋誠（シバ）の十六歳が早い。逆に老いてなお入選した作家（？）は津山週次（三六）などがいる。安部慎一の二十歳（「やさしい人」）というのは何となく分かる気がするし、蛭子能収（二五歳で入選）は当時サラリーマンだった。

出身地

ガロでデビューした作家、および主にガロで活躍している作家の出身地を見てみよう（図1）。やはり一番多いのは東京、関東地方。文化の中心で情報が入りやすく、出版社が集中しているので、これは当然の結果だろう。ガロ作家に限らず、東京出身の作家は多い。次いで東海、近畿地方。劇画発祥の地、大阪出身の大物作家は多く、かつての劇画工房に拠った作家のほとんどが大阪出身。手塚治虫も大阪出身であることを考えると、大阪は劇画に限らず、いわゆ

全国マンガ家分布図

（図1）

海外
◎林静一，日野日出志（旧満州）
村野守美（中国，大連）
◆赤塚不二夫（中国，熱河省）

中国地方
鳥取県
◎水木しげる，山松ゆうきち
◆谷口ジロー

島根県
◆園山俊二

岡山県
◆一条ゆかり

広島県
◎井口真吾，渡辺和博
◆かわぐちかいじ

山口県
◆青池保子，弘兼憲史
水野英子

北陸地方
富山県
◎津野裕子
◆藤子・F・不二雄
藤子不二雄Ⓐ

石川県
◎泉晴紀
◆永井豪

福井県
◎池上遼一

信越地方
長野県
◎藤沢光夫

新潟県
◎近藤ようこ
◆小林まこと
高橋留美子
水島信司

九州地方
福岡県
◎安部慎一，山野一
◆古賀新一，小林よしのり
北条司，松本零士

佐賀県
◆伊万里すみ子

宮崎県
◆赤星たみこ，あすなひろし

熊本県
◎とり・みき
◆江口寿史，松森正

鹿児島県
◆バロン吉元

長崎県
◎内田春菊，蛭子能収
丸尾末広，Ｊｅｒｒｙ
◆岩谷テンホー，ケン・月影

四国地方
高知県
◆青柳裕介，黒鉄ヒロシ
はらたいら，やなせたかし
弓月光

香川県
◎秋山しげのぶ，友沢ミミヨ
◆植田まさし，喜国雅彦

徳島県
◆柴門ふみ，竹宮恵子
山上たつひこ

愛媛県
◎杉作Ｊ太郎
◆谷岡ヤスジ

東海地方
愛知県
◎高信太郎，鈴木翁二
仲佳子，みぎわパン
◆いしかわじゅん
とりいかずよし，鳥山明

静岡県
◎秋竜山，望月勝広
◆さくらももこ

近畿地方
滋賀県
◎古川益三

京都府
◎ひさうちみちお，みうらじゅん

大阪府
◎東元，森元暢之，淀川さんぽ
辰己ヨシヒロ，桜井昌一，影丸穣也
◆手塚治虫，池田理代子，川崎のぼる
桑田二郎，さいとう・たかを
佐藤まさあき，サトウサンペイ
里中満智子，ビッグ錠，美内すずえ

奈良県
◎森下裕美
◆楳図かずお

兵庫県
◎奥平イラ，川崎ゆきお
佐々木マキ，つりたくにこ
◆うのせけんいち，士郎正宗
牧美也子，横山光輝

三重県
◎小島剛夕

る現代マンガを生み出した地ということが出来よう。ガロ系で関西文化圏（?）を代表する作家としては、川崎ゆきお、ひさうちみちおなどがいる。やはりギャグ系の作家が多いように思えるのだが、気のせいだろうか。変わったところでは佐々木マキが神戸出身。作風を考えると妙に納得する。
下って中国、四国、九州地方はどうだろう。何といっても面白いのが長崎。内田春菊、蛭子能収、丸尾末広、Ｊｅｒｒｙが長崎出身。一体どういう所なんだろう。戻って北陸、信越、東北地方。何か共通性が見られるようだ。いわゆる〈つげ義春以後〉の、土着性を盛り込んだマンガの描き手はこの辺の人が多い気がする（気のせいか）。ますむらひろしは山形、勝又進は宮城、菅野修は岩手県出身。新潟県の近藤ようこと高橋留美子は高校の同窓生で、二人とも漫研に所属していたという。北海道出身者は平口広美、イタガキノブオ、唐沢兄弟、三本義治がいる。以上、出身地と作品傾向は、関係ないようで実はあったりして（長崎だけは分からないが）。

落選して大物になった作家

「ガロ出身者はガロに描かなくなると出世する」という、編集部が困ってしまうようなジンクスがあるが、「ガロに持ち込んで断られた人はもっと出世する(?)」という、編集部がもっと困るような噂もある。「ガロ曼陀羅」を読んでみると、畑中純、相原コージといった人達があっさり断られていといった人達があっさり断られている。投稿者諸君、落選して落ち込むことはない。今はビッグになった作家も、落選を何度も経験して大きくなったのである。

M・A

ガロ「入選作品」について

――マンガを画こう！――

〈新人の投稿を期待〉

いままで私は手紙等により、マンガ家志望の人々に反対してきた。それは、失敗すればマンガ家はツブシがきかないからである。

だが、いまや世の中は、高度成長政策のヒズミから、中小企業の倒産、物価の上昇、と貧富の差はますます激しくなってきている。やがて失業者が激増し、求人難から求職難へと反転する過程で、とうぜん自由業への移行もまた激しくなるであろう。

自由業がすなわちマンガ家ではもちろんないが、世の中の不満をマンガにたくして訴えてゆく必要性は、充分、存在する。

いままでは、新人マンガ家誕生の空白時代といってよかった。この世界に新風をそそぐうえでも、また、既成のマンネリ・プロ作家に刺激を与える意味でも、そろそろ新人誕生による新陳代謝があってよい時期である。

ひとりで似顔絵を画いていても、マンガ家には育たない。また、有名な作家に弟子入りをしても、マンガは上達しない。まず、独創的なストーリーをおのれの技法で臆せずに画きたてることである。

この雑誌「ガロ」を土台にして、新人マンガ家がぞくぞく誕生することを期待する。

まず、おのれの実験を発表してみなければ、おのれを知ることはできない。また他の者の実験は、他の者への刺激となるであろう。その実験と刺激の中でこそ、成長がある。

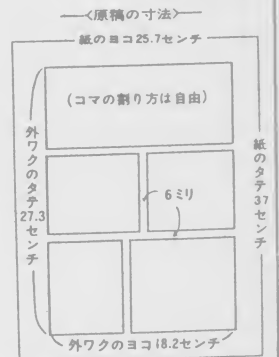
そうした意味からも、既成雑誌には無いおのれの実験の場として、この「ガロ」を大いに利用していただきたい。

白土三平

投稿規定

① おもしろいこと。
② 内容第一。
（技術は実験、経験をとおして、おのずと進歩するものです）
③ 30ページ以内。
（1ページでもよい）
④ 時代もの、現代もの、ＳＦ、コマ画、その他自由。
⑤ 用紙＝右の寸法による上質紙か画用紙。
（コマ取りは自由）
⑥ 必ずスミ１色（墨汁または製図用黒インキ使用）で画き、アミ（ウス色）はつけない。セリフなどの文字はエンピツでかくこと。
⑦ 〆切は毎月15日（今回より変更）
⑧ 審査＝青林堂編集部、赤目プロ
⑨ 誌上に発表された作品には、原稿料を支払います。

―〈原稿の寸法〉―

紙のヨコ25.7センチ
紙のタテ37センチ
（コマの割り方は自由）
外ワクのタテ27.3センチ
6ミリ
外ワクのヨコ18.2センチ

—170—

おもしろいこと 内容第一

▼月刊『ガロ』の新人入選作品の系譜は、とにもかくにも白土三平先生による、右の「マンガを画こう！」の呼びかけに始まる。これは創刊（64年9月号）から10号目の65年6月号表3から掲載された。そして、月刊『ガロ』誌上初の入選作品が3カ月後の9月号に4本同時に掲載される。

☆『顔の曲がった男の物語』東京都・星川てっぷ
☆『人々の埋葬、神々の話』兵庫県・つりたくにこ
☆『おチョコで呑まない酒』横浜市・陳志明
☆『真　　昼』東京都・渡二十四
<順不同>

以上の4本である。この号（65・9）では、『新人募集第一回入選作発表』という事で、応募総数125作品、先の4作が「入選」で作品掲載、他にタイトルとページ数、作者名を記載される「佳作」が18作、その他扱いの「選外佳作」が103作という記載がなされている。（合計で応募総数となる）尚、佳作の中には大谷弘行（谷弘兒）の名前がある。

さて、上記の白土先生による応募規定の中で、第一に「おもしろいこと」、第二に「内容第一」とあり、ページ数の上限はあるものの内容については一切規定していない。要するに作品が面白く独創性があれば、少々の未熟さはあっても載せるという現在の方針と何ら変わるところはない。さらに、入選作品発表時の編集部の「選後に…」から、少々長くなるが引用してみる。

……（前略）勿論ここに掲載した四篇についても、決して満足すべきものではありませんが、この新人募集の目的は、＜埋もれた芽の発見＞にあることを考えて、特にその将来性に重点をおきました。今回選ばれた四人の人達をはじめ、惜しくも選に洩れた多くの人達の努力に大きな夢を託したいと思います。

また、今後も、新しい問題を提起するような意欲的な作品を取り上げてゆく方針です。ひき続いて御応募下さい。

言うまでもなく、誌上に発表される作品の評価は、読者によってなされるべきものです。そこで、10月号には、新人の入選作品に対する読者の批評を小特集したいと思います。左記の要領で、熱意と愛情ある批評をどしどしお寄せ下さい。

……

※　※　※

現在ガロ編集部では、新人の投稿を随時受け入れており、また年間新人大賞『長井勝一賞』も引き続いて選考しております。1965年の新人入選作品「選後に…」と全く同じ精神で、我々もまた今回掲載した新人に対するご意見・批評をお待ちしております。

ガロ編集部

TEXT BY C.S(GARO)